

世界一の選手の努力から学ぶ

メジャーリーグで三千本安打を達成し、史上三十人目の快挙として、メジャーリーグ殿堂入りが確実視されるイチロー。日米通算では、四二五六安打のピートローズを抜いて、世界一の記録を伸ばしている。個人的には、試合数が少なく好投手が多い日本での安打記録はメジャーリーグの記録に全く引けを取らないと感じている。今回は世界最高打者イチローから学んだことを伝えていきたい。



イチローは小学生時代から年間三百六十日は練習をしていた。バッターの生命線である選球眼やミート力は、バッティングセンターで「ボール球を振るな」という父からの教育によって培われた。毎晩のように足のマッサージをしてくれた父とともに二人三脚で頑張った。一流のプロ野球選手になるという夢は、周りからは笑われていた。しかし努力の結果、オリックスに入団しプロ野球選手になる。三年目から頭角を現し、七年連続首位打者など日本記録を多数樹立。そして、米国に渡った。

私がイチローの影響を受けたのは、十数年前に、『開運！なんでも鑑定団』初代スポーツ鑑定士の前野重雄氏から話を聞いたのがきっかけだ。イチローとは、新人時代に相談に乗って以来のお付き合いだそう。イチローは、オリックスでのチーム練習が終わった後、たった一人室内練習場に残り、練習をした。なぜ一人だったのか。メジャーリーグ使用球で練習し、どう打てばヒットにできるかを研究していたのだ。メジャーリーグに行く三年前、首位打者の成績を維持しながら、未来に向けて準備をしていたのには、大変驚いた。

選

手としての最優先事項は、フィールドに立つこと。ケガをしにくい体づくりが大切だ。イチローの体はしなやかに見えるが、実は硬いそう。だからこそ、若いころからストレッチに余念がない。ちょっとした時間があれば常にやっている。打者にとって大切な目を、イチローは特にいたわっている。メールは奥さんが代行する。遠征先でのホテルの照明は明るいものにしてもらう。高級レストランなど、間接照明で店内が暗いところは、極力避けるのだという。なんとという徹底ぶり。

バッターボックスに入るときのサムライポーズは、目の焦点をバットに合わせるための行動なのだという。前野氏曰く「でも、あのポーズはカッコイイからやっていると思いうよ(笑)」。いずれにしても、プロとして大切なことである。

世界一の選手から何を学び、活かしているのか。私は経営者として社員を預かり、教育者として会員の夢を預かる。リーダーとして気づきや学びを率先垂範している。時間が空いたときは縄文ストレッチ。朝は四十分間のウォーキング。砂利や土の上など、なるべく凸凹の道を歩き、足首の柔らかさとバランス感覚づくりを意識している。おかげで硬いと言われ続けた体も、少ししなやかになった。自分に必要な勉強も日々続けている。状況によって成果にはムラがあるが、努力にムラはいらないのだ。

イチローもひとりの人間。偉業に感嘆し、祝福するばかりでなく、そこに至るまでの努力から学び、活かしていくのだ。食欲の秋、運動の秋、読書の秋、器を大きくするきっかけとなれば幸いである。

(株)キャリアコンサルティング 代表取締役社長 室舘 勲
Murodate Isao

1971年青森県に生まれる。2003年株式会社キャリアコンサルティングを設立。2007年ブータン王国立マネジメント大学にて講演。就活支援「プレミアムスタイル」は2016年4月入社の内定率99.22%を達成。著書に「夢を見て 夢を叶えて 夢になる」(致知出版社)、「まずは上司を勝たせなさい」(講談社)、「仕事で結果を出す人の頭の中」(しのめ出版)がある。